

時代とともに現れた 新しい労働観・ 生活観

フリーター

フリーター（フリー・アルバイトの略）
定職に就かずアルバイトを続けることで生計を立てる人
（岩波書店「広辞苑」より）

「フリーター」という言葉は、いまや辞書や新聞の社説にまで登場し、職業や社会的な属性を表す言葉として、私たちの生活にすっかり定着した感がある。

一般的にフリーターには大きく二つのタイプがある。一つは、特定の職場で継続的に働くが、自分の用事や生活サイクルを優先して、自分の時間にあわせて勤務を行うというタイプである。もう一つは、自分の興味や関心、家計の状況によって、短期的に次々と仕事内容や職場を変えていくタイプである。

前者のタイプには、自分のやりたいことや将来の夢がはっきりしており、そうした

- 〔財団法人日本企業協会「フリーアルバイトの就業観」平成15年〕
- ・年齢 20～25歳が半数を占める
 - ・暮らし方 半数は家族と同居
 - ・働く日数 (アルバイトの多い月) 平均23・2日
(アルバイトの少ない月) 平均15・4日

フリーターのプロフィール

事を行うために、日常的な時間の自由度を重視する人が多い。後者は、まだ明確な目標がなく、自分のやりたいことを発見するために、仕事も含めていろいろな体験を試みようという若者が中心である。

いずれにせよ、組織や他者にとられず、自分の時間や行動を重視した毎日を過ごしている点が生活行動における大きな特色であり、こうした自由度の高い生活ぶりには、朝出かけるまでの時間の長さや、夜の生活時間の過ごし方など、今回の生活行動調査からも読み取れる。

フリーターが登場した背景として、ここ十年ほどの間の日本社会の変化や日本人の意識の変化があげられる。

近年、コンビニエンス・ストアや宅配便などに代表されるサービス産業が急激に拡大

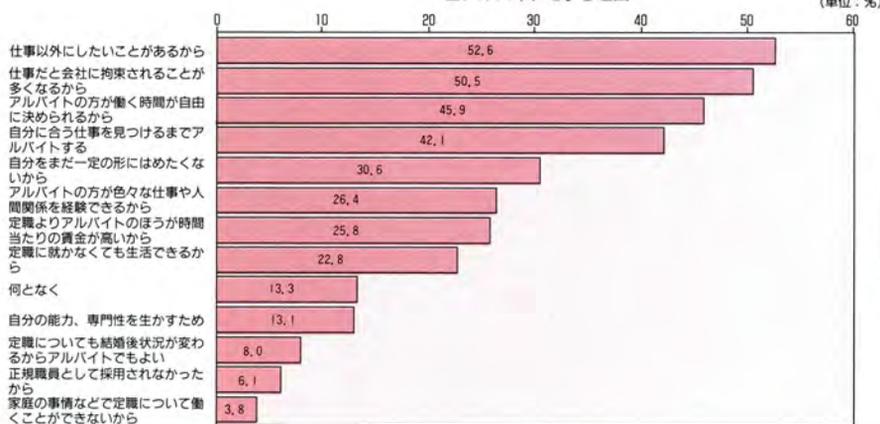
大、二十四時間営業などのサービスの高度化が進む中で、不規則な勤務時間や仕事量の増加をカバーするアルバイトへの需要や期待が高まった。こうした日本の産業構造、雇用環境の変化とともに、フリーターたちが自由に職場を選択でき、また一カ月の生活を送れるだけの収入の道が開けたのである。

もう一つは、若い世代を中心に「仕事よりも個人の生活を大切にしたい」と考える人たちが増加していることにある。こうした意識の高まりや広がり、自分のやりたい活動を第一に考える生活を送りたいという欲求につながり、先にあげた社会環境の下、フリーターが出現したと考えられる。

最近の景気動向から働く場が減少しているために、フリーターへの注目度はやや弱まったようではあるが、特定の企業や組織の管理体制にしがらみなく、自分の生活スタイルや興味・関心に合わせて勤務時間や職種を選択するという点で、フリーターは、単に職業を表わす言葉だけでなく、新しい生き方を示す言葉ともなっている。

いずれにせよ、終身雇用・年功序列を基調としてきたこれまでの日本の雇用制度の中で、社員（職員）という形態にこだわらないフリーターの登場は、日本人の職業観や生活観の変化を示す新しい動きといえるだろう。

■アルバイトをする理由



■今後の職業生活についての考え

